



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伊藤博明著「ヘルメスとシビュラのイコノロジー」(ありな書房, 1992年)
Author(s)	阿部, 包
Citation	基督教学, 28, 44-48
Issue Date	1993-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46525
Type	other
File Information	28_44-48.pdf



伊藤博明著『ヘルメスとシビュラのイコノロジー』

—シエナ大聖堂舗床に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究—

(ありな書房、一九九二年)

阿 部 包

ウンブリアやトスカーナ地方には中世・ルネサンスの面影を色濃くとどめる街が幾つも残っている。ペルージア、アッシジ、シエナ、そしてフィレンツェ等。中でもシエナのドウオーモの扉を押し開けて堂内に一歩足を踏み入れた者は、そこに展開する舗床の意匠にある種の戸惑いを覚えるに違いない。「何故、カトリックのドウオーモの舗床にヘルメス・トリスメギストスとシビュラたちなのか?」と。いわば「異教趣味」ともとれる世界が床一面に広がっているのである。

平たく言えば、この素朴な疑問に答えること、或いはこの謎解きをすること、それが本書の目的である。著者自身はパノフスキーによるイコノロジーの定義を利用しつつ、「シエナ大聖堂舗床のヘルメス像とシビュラ像の『内在的意味すなわち内容』(intrinsic meaning or

content)を、ルネサンス期イタリアに固有なある思想的な根本的原理(哲学的・宗教的シンクレティズム)を確証することによって把握すること」とそれを表現する。そして、その際必然的に要請される二つの視座として、「シエナ大聖堂舗床のヘルメス像とシビュラ像を、哲学・宗教・文学・美術を含んだ一つの歴史的レミニサンスの集積として理解すること」と「それらの像を、ルネサンスという時代が内に孕んでいた思想的可能性の一つの集約として把握すること」(一三三頁)とを上げている。

ここで評者の印象を先に記せば、少なくともこれら二つの視座は常に意識され続けているし、先の目的もかなり高いレベルで達せられているように思われる。

先ず、本文の構成を示そう。

- I 古代・中世におけるヘルメスとシビュラ
- 1 ヘルメスと『ヘルメス文書』
- 2 シビュラと『シビュラの託宣』
- 3 キリスト教教父による論究
- 4 中世における伝承と創意

II ルネサンスにおけるヘルメスとシビュラ

5 ヘルメスの再生と流伝

6 シビュラを受容と変成

7 ヘルメス主義の興隆

8 シビュラの造形表現

III シエナ大聖堂におけるヘルメスとシビュラ

9 哲学的・宗教的へ危機へ

10 シビュラのイコノロジー

11 ヘルメスのイコノロジー

12 哲学的・宗教的シンクレティズム

他に、本文の前に序が、本文の後に註、あとがき、文献、固有名索引がつけられている。

シエナのヘルメス像については比較的よく知られている。「高い帽子を被り、オリエント風の衣装を身にまとい、豊かな髭をたくわえた老人」。スコット編纂の『ヘルメティカ』第一巻やF・イエイツの名著『ジョルターノ・ブルーノとヘルメスの伝統』のフロント・ページなどでお馴染みなのは著者が序で(八〇九頁)紹介している通り

だし、わが国では荒井猷・柴田有訳『ヘルメス文書』(朝日出版社、一九八〇年)のカバーを飾っていたのを記憶している方も少なくないだろう。しかし、ドウオーモとヘルメスとの関係は紹介されてはいなかった。ましてや両サイドに居並ぶ一〇体のシビュラたちについてはなおさらである。

実際にドウオーモの舗床にシビュラが「再生」するのは一四八二年(五体)、八三年(五体)であり、ヘルメスが「再生」するのは遅れて一四八八〜八九年であった。時の大聖堂管理局監督官はアルベルト・アリンギエーリ。シエナでただ一人の聖ヨハネ騎士団員である。個々の作者についても著者は管理局文書館の「出納報告書」に関する最近の研究に基づきながら同定・推定を行なっている。

さらに、ヘルメスやそれぞれのシビュラに添えられたインスクリプションと託宣の子細な検討を通して、そこに「ヘルメスとシビュラにたいするラクタンティウスの態度を受け継ぎながら、それを自らの議論の中で発展させた」フィチーノのイタリア・ルネサンス期における圧倒的な影響力を確認している。「ラクタンティウスとフィ

チーノはヘルメスとシビュラとともにキリスト教を予言する者として理解していたのであり、このことがシエナ大聖堂鋪床を読み解くさいの前提となっている。そこに描かれた「ヘルメスは『靈において生まれた神の子』、すなわち宇宙論的力としてのキリストを、またシビュラたちは『肉において生まれた神の子』、すなわち受肉したキリストを、それぞれ予言している」のである(二四一頁)。著者にこのような洞察を与えたのは、ラクタンティウスの『神学体系』の記述とフィチーノの議論(『ピマンデル』の「要旨」や『キリスト教について』)の考察であった。

そしてドウオーモの鋪床に凶像として定着したこのような異教とキリスト教とのシンクレティズムの思想的母胎或いは時代精神として「哲学的・宗教的シンクレティズム」が論じられている。勿論、主要な論及はフィチーノ及びピコであるが、むしろ重要なのは司教アントニオ・デリ・アリ(一四〇〇頃―一四七七)の写本「信仰の根拠について」の紹介であろう。「生涯を実際のな教会人として過ごした」アリがフィチーノやピコと同じ時代精神の体现者であることの指摘である。

このシンクレティズムが解決しようとした一五世紀後半の「哲学的・宗教的危機」(ゲミストス・プレトン、ベッサリオン、サヴォナローラ)を論じている箇所でもう一つ重要な指摘がなされている。それは一四八四年四月にローマに登場した預言者風の人物、「ヨハネス・メルクリウス・コリジオ」と名乗るジョヴァンニ・ダ・コレッジョについてである。著者によれば「中世後期に出現した『預言者』たちと同様な、神的な啓示を受けた人物だった」らしい。しかし、「注目すべきは、フィチーノが『ピマンデル』の『要旨』において述べていた、『キリストについて予言したヘルメス』という觀念が一般の信徒にも浸透していたという点である」(一九七頁)。そして、一四八四年の彼の説教が一人の桂冠詩人を「ヘルメス主義者」に転向させた。L・ラザレツリである。彼は、「ジョヴァンニの影を宿した、いわば『預言』的著作」『ヘルメスのクラテール』を残した。時期はあたかもドウオーモにヘルメスが描かれた時期であった。

アリの件といいジョヴァンニやL・ラザレツリの件といい、実際の教会人や一般民衆のレベルでいかにヘルメ

スやシビュラがキリスト教と合致する予言者として受け入れられていたかを物語っている（さらに、一四五四年のフィレンツェの守護聖人洗礼者ヨハネの祭日に野外祝典の山車上に現れたキリストを予言するヘルメスとシビュラ（八八頁）を加えよう）。

以上は、本書の表題と直接的に関連するⅢの概略であるが、Ⅰ、Ⅱはその前史である。Ⅰは、古代におけるヘルメスとシビュラの起源から説き起こし、さらに古代・中世におけるそれらの変遷と受容史を一次資料に基づいて丹念に跡づける。Ⅱはルネサンスにおけるヘルメスの再生とヘルメス主義の興隆を、さらに造形表現を中心にシビュラ受容を論じる。「独特のシンクレティズム」を示すヘルメス文書群の成立（『アスクレピオス』）。そして固有名詞から普通名詞に（単数から複数へ）変遷を遂げ、ローマの作家ウァロに至って一〇人のリストに結実するシビュラたち（ローマ社会におけるシビュラの予言集の成立から焼却にいたる興味深い顛末や後にアウグスティヌスによって一部がラテン訳によって引用される『イエス・キリストを指し示すアクロスティック』―『シビュ

ラの託宣』も勿論紹介されている）。

ヘルメスとシビュラの受容史に重要な役割を演じるキリスト教教父について結論的に言えば「ラクタンティウスが自己のキリスト教弁証論において『ヘルメス文書』と『シビュラの託宣』を十分に活用したことが、その後のヨーロッパ文化におけるヘルメスとシビュラの受容」史に「計り知れない影響を与えることになった（四九―五〇頁）。キリストを予言するシビュラという点では、アウグスティヌスやウエルギリウス『詩選』第四歌も重要な影響を与えるが、ヘルメスをも同等に評価するという点でラクタンティウスの影響はまさに計り知れないのである。彼はルネサンス期イタリアにおいても圧倒的な人気を博した（八六頁）。そしてフィチーノは彼の権威に拠りながら「ヘルメスをシビュラと並ぶキリスト教の予言者として復活させた」のだった（二四―一頁）。シビュラの図像表現についても著者は中世からルネサンスに至るまで多くの図版を駆使しながら、その受容と変遷を丹念に辿り、解説を試みている（Ⅰ4、Ⅱ8、参照）。

評者はⅠ4、Ⅱ5、Ⅱ7などの叙述に特に著者の面目

躍如たるものを感じたが、他の叙述をも含めて本書はまさにルネサンス記述にふさわしい(博引傍証)を一つの重要な方法として思われる。紹介しなければならぬ指摘はまだ多く残っているが、ここで著者自身の結論を引いておこう(二五九頁)。

「シエナ大聖堂舗床に描かれたヘルメスとシビュラは、その基本構想において、ラクタンティウスの『神学体系』の記述に拠っていた。しかし、その構想が採用されるにあたっては、背景に一五世紀におけるシビュラの画像の普及があり、またフィチーノ訳『ピマンデル』に端を発するヘルメス主義の興隆とヘルメス主義的預言者の出現があった。さらにそこには、フィチーノの教説からの直接的な影響もうかがわれた。しかし、フィチーノの、そしてピコ・デッラ・ミランドラの哲学的『宗教的シンクレティズム(混濁主義)の壮大なプログラムに照らして見るならば、シエナ大聖堂舗床に描かれたヘルメスとシビュラは、そのごく一部を実現したに過ぎなかったと言わざるをえない。とはいえ、この哲学的『宗教的シンクレ

ティズムなしには、ヘルメスとシビュラが描かれなかったこともまた事実なのである。それはある特定の時と場所においてのみ可能であった。つまり、哲学的『宗教的(危機)の解決をプラトン・アカデミアのシンクレティズムに求めた、一五世紀後半のトスカナ地方においてのみ可能な事件だったのである。実際、ヘルメスは爾来、ボルジア家の部屋(ヴァティカン)の壁面以外には見いだされず、無論キリスト教の聖堂内に描かれることは一切なかった。」

最後に、同時代に現れた預言者風の人物ジョヴァンニと司教アントニオ・デリ・アリに関する紹介・考察が、彼らの重要性に比して不十分であるような印象を受けた。それから、誤植が意外に多い。プリュギアがかなりの箇所でビュリギアとなっているし、三三頁一行目「古代の東アジア」は文脈からして余りに唐突だろう。「キリスト教父」という表記も「キリスト教教父」か「教父」とすべき。総じて、人名・地名に不注意ミスが多い。